

## 帆坂池の主

## 赤穂市大津

帆坂池の主は、玄能であるといわれていま  
す。玄能というのは、石工が石を割るときに  
使う鉄の大槌のことです。

昔はこの池に、主としてうわばみ（大蛇）  
が住んでいました。池のまわりには、何百年  
もたったと思われる大きな杉の木がいちめん  
に茂っていて、昼でもうすぐらく、いかにも  
うわばみが住んでいそうな池でした。  
池のうわばみは、一日に一度は息をするた

めに、池の面に姿をあらわさねばなりません。  
姿を水の上に出しますと、まわりの杉の木の  
枝から露が落ちてきて、うわばみの背中を打  
ちます。このことが毎日続きますので、うわ  
ばみの背なかの皮がくさりはじめました。し  
かし、息をするためには、どうしても一度は  
水面に出なければなりません。浮かぶ場所を  
いろいろ変えてみましたが、池をおおうよう  
に杉が茂っていて、どこに浮んでも杉の露が  
落ちてきてうわばみの背中を打ちます。傷は、  
だんだんひどくなってきました。これでは、  
背中がくさってしまうと心配になったうわば  
みは、ある日、武士の姿に身を化して、備前  
（岡山県）の湯の郷の温泉へ湯治（温泉に入

って病を治すこと）に出かけました。三月ほどの湯治で、背中の傷がすっかりよくなりましたので、うわばみは、武士の姿のまま赤穂に帰り、侍となって殿さまにつかえることにしました。

「あの池のまわりに杉の林があるかぎり、露が落ちて、背中をくさらせるにちがいない。なんとしても、一本も残さず杉の木を切ってしまうなければ安心してこの池に住むことができぬ。」と考えたのです。その年の夏は、雨が一滴も降らず、ひどいかんばつになりました。田の水はいうまでもなく、飲み水まで不自由になってきました。だれもが、雨を降らすよい考えはないかと思いなやんでいると

き、うわばみの武士は殿さまに申し出ました。「帆坂池のまわりの杉の木を残らず切りたおしたら、きっと大雨が降ります。」

と、殿さまも、困っている時だったので、大そう喜んで、さっそく家来のものに池の杉を切りはらわせました。しかし、一滴の雨も降ってきませんでした。かえってかんばつがはげしくなってきました。

殿さまは、大そう腹を立てて、その武士を捕えるよう命じました。家来のものが、繩をかけようとしみますと、武士は本身をあらわし、大きなうわばみの姿となって、城をぬけだし帆坂池に逃げこみました。家来のものどもは池まで追いかけてきましたが、どうすること

もできません。とおりがかった石工いしくがこれを見て、持もっていた玄能げんのうを池いけの中なかに投げこみました。かんばつで水みずが少なくなっていたため、玄能げんのうはうまくうわばみの頭あたまにあたりました。うわばみの頭あたまから血ちがふきだし、血煙ちけむりとなつて空高そらたかく舞まい上あがり、まっ黒くろな雲くものかたまりになり、その雲くもからはげしく雨あめが降ふってきました。うわばみはその雨足あまあしを橋はしとして、池いけを出でて黒雲こくうんにのり、どこかへ行いってしまいました。それから、この池いけの主ぬしは、玄能げんのうということになりました。帆坂池ほさかいけの水みずがいつもうす茶色ちやいろににごっているのは、玄能げんのうの錆さびが少すこしずつとけてくるからだといわれています。



帆坂池（赤穂市大津）